



日本経済新聞社では、既存のSAN (Storage Area Network) を SilkWorm Multiprotocol Router (MPR) で接続し、バックアップシステムの統合と、それによる運用管理コストの一層の低減を実現しました。これをステップに、同社はMPRを使ったディザスタ・リカバリ・システムを2006年には構築する計画であり、その後、全社レベルでのSANの統合を進めていく考えです。

SOLUTIONS

概要

●技術的課題：

運用管理コストと負荷軽減のため、バラバラに構築したSANの統合と、個別に行っていたSANのバックアップ統合が急務であった。そのため、異なるSANを相互接続するルーティング装置が必要になった。

●導入製品：

SilkWorm Multiprotocol Router (MPR)

●ソリューション：

SilkWorm Multiprotocol Router (MPR)によって、新聞系のSANと業務系のSANを接続、統合したバックアップストレージに両者のバックアップデータを格納。

●成果：

英文組版システムと業務系システムのバックアップを、統合したストレージで実現。運用管理コストと負荷を軽減するとともに、バラバラに構築したSAN統合のためのステップを築いた。

既存のSANを SilkWorm Multiprotocol Router(MPR)で接続しバックアップシステムの統合を実現

日本経済新聞社は1876年の創立以来130年近く、独立・自主の精神を守り、言論報道機関としての役割を着実に果たしてきました。同社は現在、日本経済新聞、日経産業新聞、日経MJ(流通新聞)、日経金融新聞、THE NIKKEI WEEKLYの新聞5紙をはじめ、NIKKEI NETなどの電子メディアやデータベースサービス、放送・電波、出版、文化事業まで、経済を中心とした情報を総合的かつグローバルに提供・発信する体制を築いています。これを可能にしているのが、新聞系システム群と電子メディア系システム群、そして業務系システム群からなる情報システムです。

新聞、電子メディアなどを支える多岐にわたるシステム開発を最適化

新聞系システム群は、編集組版システム EDISON21と記事の投稿・編集システム

PLESを軸に、紙面制作や版面管理、広告管理など多数のサブシステムから構成されています。一方、電子メディア系システム群は、インターネット上のニュースサイト NIKKEI NET、記事や経済のデータベースサービス日経テレコン21・NEEDSなどを中心に、サービスごとに多数のサーバー群が存在します。これらのシステムは構成も大小様々で、ベンダーも異なっており、それぞれが別々のストレージを持つ形で運用されてきました。

日本経済新聞社情報技術本部システムマネージャーの木下和之氏は「2001年に、それまでバラバラに行っていたシステム開発を一本化するため、情報技術本部を設立、開発部門を集約しました。その中に、インフラ統括グループを設け、システム開発全体に横串を通す形で、サーバーやストレージ、ネットワークの最適化を図っています」と話します。

NIKKEI



BROCADE



日本経済新聞社
情報技術本部 システムマネージャー
木下 和之 氏

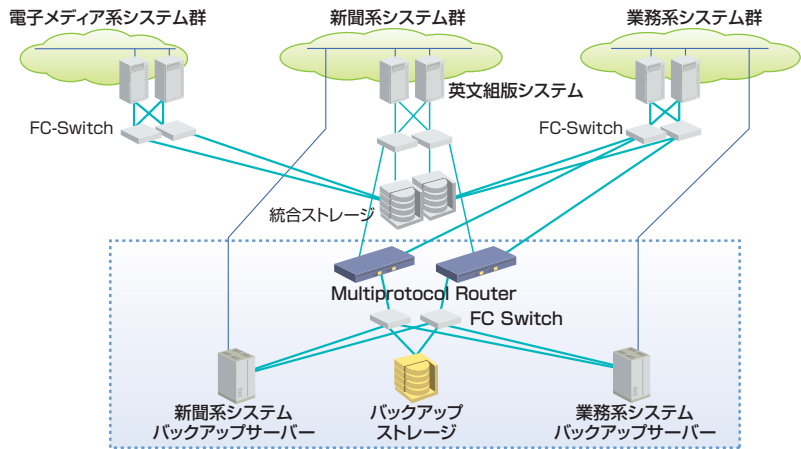


日本経済新聞社
情報技術本部 システムリーダー
池谷 正則 氏



日本経済新聞社
情報技術本部
前川 博昭 氏

図 MPRを使って既存のSANを統合したバックアップシステムの構成イメージ



統合バックアップシステム実現のため、SilkWorm Multiprotocol Routerを採用、既存のSANを統合

2002年後半、同本部ではシステムコストの2割削減を目標として様々なコスト削減策を立案、その一環としてストレージの統合、SANの構築を計画しました。その際、SAN構築に重要な役割を果たすFC(ファイバーチャネル)スイッチのトップベンダーであるプロケードコミュニケーションズシステムズから助言を受け、2003年秋にはホスト用ストレージの更新に合わせて、業務系の経理や総務、販売の各システムを接続し、業務系のSANを構築しました。ところが、新聞系、テレコン・NEEDS系、NIKKEI NET系は管理ポリシーが異なるため統合を断念、それぞれ個別のSANを構築しました。

情報技術本部システムリーダーの池谷正則氏は「こうしてSANを構築しましたが、今度はシステム群ごとに構築されたバラバラのSANを統合して、管理負荷を軽減することが新たな課題になりました。また、現在SANごとに行われているバックアップを統合し、管理コストを削減することも必要でした」と言う。そのため、新聞系システム群のNIKKEI WEEKLY用英文組版システム更新を機に、新聞系システム群と業務系システム群のバックアップの効率化を図ることを計画しました。

2004年秋、プロケードのCEOであるマイケル・クレイコーが来日した際に、ユーザー企業である日本経済新聞社を訪れました。クレイコーは既存のSAN環境は維持したまま、SANの相互接続を実現するSilkWorm Multiprotocol Router(MPR)をリリースし

たことを説明しました。この説明を受け、同本部ではMPRがバラバラのSANとバックアップの統合を可能にするための最適なソリューションになるのではないかと考えました。そして、プロケードが推薦したアイアイジェイテクノロジーからMPRを利用した統合バックアップシステムに関する提案を受けたのです。

実績を積み重ね、MPRを活用した全社レベルのSANの統合を目指す

こうして、2005年2月、同本部は統合バックアップシステムの導入を決定、2005年7月にはまず、新聞系の英文組版システムのバックアップがスタートしました。「バックアップシステムは、MPRを経由して新聞系システム群のSANと業務系システム群のSANをそれぞれバックアップサーバーやストレージが存在するSANに接続し、各システムのデータを高速ディスクベースバックアップする仕組みになっています」

情報技術本部の前川博昭氏は「MPRの国内初の導入だったので、ストレージベンダーによる事前検証が十分にできなかったことに加え、既存のSANと新たに導入し

たバックアップシステム用のSANがヘテロな環境であったこともあり、きちんと動作するかどうかを大変心配していました。しかし実際には、結合テストでも何の問題もなく動作し、カットオーバー後も順調に稼動しており、その信頼性にはとても満足しています。今では普通のスイッチだと思って使っています」と打ち明けます。

続いて、同社では年内には業務系システム群のSANをMPRに接続、英文組版システムと同じストレージでバックアップを取っていく計画です。また、2006年には現在、東京・大阪にある新聞系システム群の版面管理、紙面送出、広告管理の3システムが更新されます。そこで、今回の統合バックアップシステムの経験を生かして、MPRを使って東京と大阪のSANを接続し、ストレージレベルでのディザスタ・リカバリシステムを構築する計画です。

同本部では、このように順次実績を積み重ねながら、もうひとつの目的である全社レベルでのSANの統合を進めていく考えです。そうした中で、より高いセキュリティや信頼性の確保なども含めて、プロケードに対する期待が高まることは確実です。



プロケードコミュニケーションズシステムズ株式会社

〒100-0013 東京都千代田区霞ヶ関1-4-2 大同生命霞ヶ関ビル11階

TEL.03-6203-9100 FAX.03-6203-9010 Email:japan-info@brocade.com

Brocadeに関するより詳しい情報は、以下のWebサイトをご覧ください。

<http://www.brocadejapan.com>